

3月17日 ヨハネによる福音書12章20～36節

説教題：「人の子は上げられなければならない」

イエス様は、今日の個所でそう語るように、「人の子は上げられなければならない」という義務を負っていました。十字架の上で死ぬという預言は、律法の中で語られるメシアの姿とは相いれないものでした。だからこそ、律法を固く守る義務があったユダヤ人たちは、イエス様のことを信じるのが出来ませんでした。一方で、私たちはどうでしょうか。私たちキリスト者の「信仰の義務」とはいったい何なのでしょう。

それはやはり、「イエス様を自分の主として大切にすること」というただ一つに集約されるのだと思います。イエス様への信仰抜きにキリスト者になることは出来ません。イエス様は、私たちにとってただの歴史上の人物のような遠い存在ではなく、「私のために死んだ人」「私のために多くの言葉を残した人」「私のために、生まれてきた人」であります。そのイエス様を、大切にすることが求められているのです。そして、イエス様を主とするからこそ生まれる多くの行動が、私たちの信仰生活であり、聖書を読む事、賛美をすること、礼拝に出るといふ教会生活にもつながっていくのです。

私たちのすべての信仰の根底には、イエス様への信仰が、イエス様への愛が義務付けられています。愛することは時間や労力も使うことであり、時に献金や寄付のように、お金や食べ物を差し出す行動をも愛と呼びます。そう考えれば、それ自体は「自分が損をする行動」が、愛につながっていくことが分かると思います。自分は損をしてしまう、心の奥底では若干「いやだ」という思いもある、しかし神様のためだから行う。実はそんな行動の中に私たちが神様に示す「愛」があるのです。

この「嫌だ」という気持ち、愛の行動なのに「嫌々行っている」というと不思議なように感じます。しかし考えてみてください、もし神様が、イエス様を十字架にかけることにためらいがなかったのであれば、自分の独り子を全く惜しんでいなかったのであれば、イエス様の十字架に神様からの愛はありません。イエス様にも愛がそそがれていません。

そうではなく、愛する独り子を失うことに対して身を引き裂くような苦しみを覚えながらも、この世に生きるすべての人々が救いに至るために、神様は苦しみながらイエス様のことを十字架へと導いたのです。そのように、十字架には、イエス様の受難がありながら、それと同時に、神様の受難もあふれていたのです。

私たちには、全知全能の神様が苦しんでいる様子を、容易に想像することができません。しかし、それこそ握りしめる手に爪が突き刺さるほどの、流れる涙をとどめることができないほどの、引き裂かれるほどの悲しみと苦しみが、神様のもとにはあったのではないのでしょうか。それでも私たちのことを愛してくださったからこそ、イエス様がこの世に生まれ、そして今私たちは信仰へと導かれているのです。

私たちの信仰も同じなのだと思います。私たちが行うべき信仰の義務、イエス様を主として信じることを、進んでできるのであればそれに越したことはありません。それは素晴らしい信仰だと思います。しかし、苦しみながら、様々な物に引きずられながら、それでもイエス様を愛すると、信じると決断をすることも、大きな愛の業なのだと思います。十字架につくといふ愛を示したイエス様への愛の応答として、私たちもイエス様への愛を行動にし続けていきたいと思います。

今日の説教箇所：ヨハネによる福音書 12 章 20～36 節

- ・20:さて、祭りのとき礼拝するためにエルサレムに上って来た人々の中に、何人かのギリシア人がいた。彼らは、ガリラヤのベトサイダ出身のフィリポのもとへ来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。フィリポは行ってアンデレに話し、アンデレとフィリポは行って、イエスに話した。イエスはこうお答えになった。「人の子が栄光を受ける時が来た。はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。わたしに仕えようとする者は、わたしに従え。そうすれば、わたしのいるところに、わたしに仕える者もいることになる。わたしに仕える者がいれば、父はその人を大切にしてくださる。」
- ・「今、わたしは心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、わたしをこの時から救ってください』と言おうか。しかし、わたしはまさにこの時のために来たのだ。父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしは既に栄光を現した。再び栄光を現そう。」そばにいた群衆は、これを聞いて、「雷が鳴った」と言い、ほかの者たちは「天使がこの人に話しかけたのだ」と言った。イエスは答えて言われた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためだ。今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」イエスは、御自分がどのような死を遂げるかを示そうとして、こう言われたのである。すると、群衆は言葉を返した。「わたしたちは律法によって、メシアは永遠にいつもおられると聞いていました。それなのに、人の子は上げられなければならない、とどうして言われるのですか。その『人の子』とはだれのことですか。」イエスは言われた。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」